

勉強会を開催しました。

地域まちづくりに関する勉強会（第1回）を、昨年12月18日の会員総会の機会に開催しました。勉強会は初めに講師の先生に講演していただき、最後に参加者が意見、感想等を述べ合いました。講師は日本福祉大学・国際福祉開発学部教授の吉村輝彦氏です。

（注：第2回は本年2月下旬に開催する予定です。）

（吉村教授の講演の要旨）

●本地域には過去からなじみがありました。まちには色々な変化があり、これからの在り方に関してお話ししていきたい。最近気にかけていることは「これまで」と「これから」は相当違ってくるのではないかということ、地域まちづくりもしかりで、これまでである世代の上では当たり前に行っていたことが、若い世代になるとまったく違ってくることを気につけないといけないのではないか。これまでの行動原理とこれからの行動原理は違ってくる。まちづくり活動組織や運営の仕方もそういうことを意識しないといけない。

●まちづくり活動においても、コロナ禍のなかで活動の歩みを止めているところと、感染予防をしながらでも新たなチャレンジをしているところもある。ただしこれからはまったく新しい価値観によることになるのではと思われ、「正しい活動」だけでは長続きせず、これからは「楽しさ」ということになるのではないか。これからの活動はやり方を変えていくことが必要だと思っている。やらされるのではなく、個人個人がやりたい思いで集まり、わくわく感、ドキドキ感を持てるのが地域づくり活動にも大切ではないか。それがつながって結果的に地域が楽しいものになるのではないかと思う。

●2つの参考図書を紹介したい。一つは「マイパブリック（著者：田中元子氏）」で、自分がやってみたいと思うこと（例として動く屋台、喫茶ランドリー、軒先スペースの工夫、一階（グラウンドレベル）の再活用など）が、結果として公共空間を含め街に波及し、面白い効果を生んでいく例が紹介されている。もう一つは「パブリックハック（著者：笹尾和宏氏）」で、公共空間を私的にハックするような意味での内容だが、私的な利用が積み重なって、多様性や寛容性のある町になるのではないかとの趣旨が述べられている。この著者は初期には「アーバンアウトドア」と銘うち、規制ばかりで誰も利用しなくなっている公園などにも私的な利用を拡大し、いろいろなチャレンジができることを紹介さ

れており、これらの著作には、個人個人の思いを伸ばし許容していくことがこれからは求められるのではと思われる内容が紹介されている。

●私はこれらの著作にあるように、これからを考えていくうえで、個人の取り組みがどんどん広がっていき、合わさっていくというやり方があってもいいのではないかと思う。「構想づくり」について思うのは、初めから「こういう取り組み」でというようにつくってしまうと、一方で個人の思いや関わり場所がなくなる面があり、むしろ緩やかにいろいろな人の思いを受け止めるような「構想みたいなもの」をつくり、個人の思いを許容する、寛容的なところで成り立つようなものがよいのではないかと思っている。

●これらの話に関して参考となる取り組み事例で、次の例を紹介したい。1) 豊田市駅一遊べる豊田プロジェクト（ペDESTリアンデッキでの楽しい利用） 2) 新豊田市駅一しんとよパーク（火が使用できる公園、スケードボードの許容、芝生の取り込み） 3) 豊橋一水上ビル（800m長の老朽ビル1階でのアートのものでのチャレンジ…いずれも「やってみよう」というところから取り組まれている。

●進め方についても最近は変わってきており、これまでは「計画」⇒「実行」であったが、今後はうまくいかない場合が多くなるのではと思っている。もう少し緩やかに、大きな目標やビジョンの中で現場合わせをしながらやっていく方向になっていくのではないか。人口減少のなか正解のない時代であって、やってみて、試しながら…こういうやり方が求められ、結果的に「計画」や「構想」が生まれてくるのではないかと言いたい。「日本一おかしな公務員(著者：塩尻市職員山田氏)」では、空き家対策にあたりやってみないとわからない、のでやってみよう！とっており、「コミュニティナース(著者：矢田明子氏)」では、看護師でありながらその特技を生かして地域づくりに取り組んで、アイデアが浮かんだらまずはやってみよう！と述べられている。そのほか、自分も太田川駅前です日常における人の集まり、拡がりをも目的に実験(芝生、卓球台、ハンモックの設置)を行っている。街なかの工夫できる場所で誰もが滞在して心地よい場所にすると、いろいろな人が重なり合い、同時にコミュニケーションも育み、つながって交流を生み出すのではないかと考える。

●「これまで」と「これから」は分けて考える必要があると思っている。但し自分の立ち位置は

「これまで」も大事にしたい、一方ではこれまでの延長上に未来があるかということ、ちょっと違うかもしれないとも思う。だから、待っているのではなく意識的にこれからを呼び込んでいくために、「やってみよう」というところから変わっていくのかもしれない。「バックキャストिंग」という言葉があるが、「理想」に対して今何をすべきかという考え方である。「課題」があるから対応することも大事だが、それ以外のやり方（得意なこと、やりたいことをもっと生かして）も考えていっていいのではないかということである。

●今後のまちづくり活動にあたり、気にかけておいた方がよい国の動向を紹介したい。一つは昨今の時代を反映して、国でもこれまでの制度や計画はうまく機能せず、地域や現場から見直しを進めるようになってきていること。その中で最近のキーワードで「居心地が良く歩きたくなる街（ウォーカブル）」ということが盛んに言われ、いろいろな自治体でもこういう取り組みが行われている。たとえば道路上のオープンカフェの取り組み（北九州、名古屋の栄や堀川河川敷、南池袋など）も、人は行きたくなる場所を求めており、うまくキャッチすると街の魅力や価値を高めることができる例である。もう一つは、この新型コロナ禍を契機にまちづくりに関して検討が始められており、地域に対する眼差しには明らかに多くの人に関心を持つようになってきている。特にテレワークの拡がり、あるいは子供たちのエリア内での行先など、今までとは違った発想を人は持つようになってきた。これらをどのように捉えて、これからを見通すことができるかということが大きな「カギ」となる。まちづくりとは、自分たちのこの地域の価値は何なのかを考えることでもあり、時代のなかで、この一年、この地域でどういう暮らしをしてきたか、どういふところへ行かれてきたか、ということから、まちづくりを考えてみることも大事だと思う。

●最後に、本日のテーマは「まちづくり活動の必要性と意義」となっているが、まちづくり活動をあまり固く捉えなくても、好きなことをこの町でやりたい、やることができる、気楽に人と話ができる、そういうものだと思い、この地域のなかで探求できるとよいのではと思う。一つのイメージ例であるが、川崎市が1年半前に出した報告書の中に、日常の暮らしがある「まちの広場」の絵が描かれ、良い絵だと思っているが、日々の暮らしは大部分が日常のことであり、これからの日常をどのようにつくっていくか、一步一步やっていくなかでこのまちの「楽しさ」も出てくるのではないかと思う。（終り）